

## シューマンの室内楽

1847年には2曲のピアノ三重奏曲が作曲されている。まず第1番が6月に書かれ、その後半年も経ずに書き上げられたのが、この「ピアノ三重奏曲 第2番」である。この2曲は続けて書かれただけあって、対照的な性格を持っており、憂愁の暗さを秘める第1番に対し、第2番はより自由で明るい曲調となっている。初演は1850年2月22日ライプツィヒのゲヴァントハウスにて、クララ・シューマンのピアノ、フェルディナント・ダヴィットのヴァイオリン、ユリウス・リーツのチェロという超一流のメンバーで行なわれた。第2楽章、第3楽章が聴きどころであり、シューマンらしいロマン的楽想の充満した曲になっている。いつまでも浸っていたい気分させられる音楽である。

「おとぎ話」は、シューマンの晩年1853年に書かれた。53年と言えば、シューマンが若きブラームスと出会い、彼の音楽性に将来の希望を見出した年でもあった。その一方で数年来、心身の不調を抱え続けてきたシューマンは、翌54年にはライン川への投身自殺を図り、エンデニヒの精神病院に収容される。しかしこの作品は、そんな暗い影の片鱗すら感じさせないほど穏やかで美しく、ロマン的な曲想が羽ばたいている。ヴィオラ、クラリネット、ピアノという珍しい編成を採用し、音域も近いヴィオラとクラリネットが、軽やかに流れるようなピアノ伴奏に乗って、息の合った掛け合いをみせる。この曲は、弟子のアルベルト・ディートリヒに友情を込めて献呈された。

「3つのロマンス」は、シューマンのドレスデン時代の終わり、もっとも多産だったと言われる1849年にわずか5日で書かれた。原曲はオーボエとピアノのための作品だが、他の楽器で演奏されることも多い。幻想的な雰囲気にも包まれたロマンスで、第1曲は寂しさを感じさせる冒頭の美しい主題旋律が印象的。三部形式の第2曲は穏やかな旋律に始まり、中間部では高揚した感情に突き動かされるが、やがてもとの平穏さに戻る。第3曲では、より情熱的な心情に沿ってテンポも揺れ動き、明へ暗へと自在に表情を変えていく。

ピアノ曲、歌曲、交響曲と創作の対象を変えてきたシューマンが、本格的に室内楽に取り組んだのは32歳のとき。1842年は「室内楽の年」とも称され、3曲の弦楽四重奏曲、ピアノ五重奏曲に続いて、最後に作曲されたのがこの「ピアノ四重奏曲」であった。1843年4月5日に私的な場で初演されたのち、公開初演は翌44年12月8日、クララのピアノ、ダヴィットのヴァイオリン、ゲーゼのヴィオラ、ヴィットマンのチェロという錚々たる顔ぶれにより行なわれた。変ホ長調の第1楽章は、基本的にはアレグロ楽章だが、冒頭に12小節の序奏がある。この序奏ですべての楽章のモチーフが予告される書法は、ベートーヴェンの後期弦楽四重奏からの影響が指摘されている。序奏は展開部直前でも繰り返される。第2楽章は変ロ長調。2つのトリオをもつスケルツォ楽章だ。アンダンテ・カンタービレの第3楽章はロマン的情感に溢れた変ロ長調。チェロがC弦を全音低く調弦する。第4楽章は変ホ長調のヴィヴァーチェ。3つの主題をもつソナタ形式を、創意に満ちたフガートが縦横に駆け巡る。